

～水路とため池、隧道で紡ぐ水のネットワーク～

小笠地域かんがい用水群は、大河川が無く旱魃被害が多発していた地域に、農民の手により築かれた^{か もようすい じゅうないり}加茂用水、^{みねだようすい}十内 叭、^{みねだようすい}嶺田用水と地域を代表する 7 箇所のため池の、合わせて 10 施設の用水群である。

これらは、わずかな高低差を見極め遠方から水を引く水路とともに、川を渡る木製函渠や石造り暗渠や、上下流で連続するため池、山を越えたため池とため池をつなぐ隧道など、時代ごとの革新的で多様な技術を用いて、水源やかんがい区域を連続させるネットワークを形成した。

まず、16 世紀末から 17 世紀には、3 つの用水路が拓かれた。^か加茂用水は 1594 年に作られた 8km の水路で、5 つの村の水田を潤した。その途中には、木製の^{たつどい}龍樋と呼ばれる伏越工が施された。また、^{じゅうないり}十内 叭(掛川市指定文化財)は、1646 年に天井川の川底と高さ 6m の堤防の下を通すために、石柱で組んだ^{うめどい}70m の埋樋で、100ha の水田を潤した。さらに、^{みねだようすい}嶺田用水は 1625 年に作られた 4km の水路で、250ha の水田を潤した。3 つの用水の開発者は、いずれも水神や仏として祀られ、地域の人々は供養を欠かさない。

続いて、主に 17～18 世紀には、水源の確保のため、^{おおいけ}大池、^{ななまがひいけ}七曲池、^{たがいけ}田ヶ池、^{いぬまいけ}居沼池など 700 か所を超えるため池が築かれた。そのうち、^{おくやまかみいけ}奥山上池・^{なかいけ}中池・^{しもいけ}下池など、山間部の谷に堤を段々に築いた連続したため池が多く作られた。この連珠式ため池は、水量を確保しつつ、破堤の危険度を低減した。このようなため池の築造法等は、本地域で成立した日本で最も古い体系的な農業技術書である『^{ひゃくしょうでんき}百姓伝記』に記され、写本により全国に普及した。

さらに、18～19 世紀にかけて、複数のため池を水路トンネルや開水路で連結し、安定した水の供給機能を向上した。^{やはた}八幡池では、1760 年に延長 2km に及ぶ沼地を渡る水路により他のため池の受益地と連結した。^{や だ おおいけ}谷田大池は、1896 年に別の谷のため池と幅 1.0m、高さ 1.3m、延長 300m の導水トンネルで結ばれ、集水面積を拡大した。このような連結は各所で行われ、上下流だけでない格子型の水利ネットワークを形成した。その後も、戦後において、国家プロジェクトにより水利ネットワークは拡充し、登録施設では現在 979ha の田畑に水を供給している。登録施設を含む大井川用水は、2006 年に国の「疏水百選」に選定された。



十内 叭(地下水路)
(掛川市指定文化財)

百姓伝記→
(内閣文庫蔵)



江戸期の嶺田用水管理図 (嶺田区文書)



加茂用水 龍樋
(菊川市教育委員会蔵)



連珠式ため池 奥山下池・中池・上池

